

大学における AI 時代の翻訳教育

——翻訳プロセスの変化と学修に対する学生の認識——

Translation Education in the Age of AI at University: Changes in the Translation Process and Students' Perceptions of Learning

TAKIMOTO Masato

瀧 本 眞 人

概 要

本稿は、大学の翻訳科目における学生の AI ツールの利用実態と、それが翻訳の学修に与える影響を、学生の提出物の経年変化（2017、2021、2025 年度）から分析した。その結果、AI 翻訳および生成系 AI の利用が常態化した 2025 年度の目標テキストは、過去の年度に比べ翻訳の質が向上し、完成までの時間が短縮していることが分かった。また、学生は AI の限界を理解したうえで、新たなスキルを自ら獲得し、AI 時代における翻訳の学修の意義を肯定的に評価していた。これは、AI 活用を前提とした翻訳教育のカリキュラム再構築の必要性を示唆する。

キーワード：翻訳教育、AI 翻訳、生成系 AI、学修への影響、翻訳プロセス、学生の認識

Abstract

This paper analyses the utilisation of AI tools in a university translation class, and their impact on translation learning. These observations are based on students' submissions from three academic years (2017, 2021, and 2025). The analysis revealed that the target texts produced in 2025, where the use of AI translation and generative AI became routine, demonstrated enhanced translation quality and reduced completion time in comparison with previous years. Furthermore, students spontaneously acquired new skills while understanding the limitations of AI, and positively evaluated the significance of translation learning in the age of AI. This finding indicates the necessity of a fundamental restructuring of the translation education curriculum.

Key words : Translation education, AI-powered translation, Generative AI, Impact on teaching and learning, Translation process, Student attitudes

1. はじめに

瀧本 (2023) では、大学の専攻科目の学修において、AI を用いた機械翻訳のソフト（以下、AI 翻訳）を学生がどのように利用し、その使用に際してどういった認識をもっているのかを分析した。研究を実施した 2022 年度の時点で、ほとんどの学生が AI 翻訳（とりわけ「DeepL」）を多様な形で活用しながら、大学での学修を進めていることが明らかになった。一方で、学生は AI 翻訳の利用に対して不安やうしろめたさといった認識を有していることもわかった。本稿では、筆者が担当する、翻訳（日英・英日）を扱う専攻応用科目（以下、「本科目」）に的を絞り、この科目で、学生が翻訳に取り組む際にどのようなアプローチをとっているのか、そしてそれは AI の利用による影響があるのか、を検討したい。この科目は、幅広いスキルを網羅する外国語科目とは異なっており、翻訳に特化して学修する科目であり、まさに AI 翻訳の使用による学修への影響は小さくないと考えられるからである。

AI 翻訳の性能は、Google 翻訳が AI のディープラーニングの手法を用いたニューラル機械翻訳を 2016 年に採り入れて以降、目覚ましい進展を遂げ、実用的なツールとして用いることが可能となっている（隅田、2022）。さらに、2022 年には OpenAI 社が ChatGPT を一般公開し、日常生活における生成系 AI の浸透は加速化している。本科目で学生に課す翻訳のタスクにおいても、学生がこれらのツールを活用しながら課題をこなしていることは、後述するとおり、学生自身が明らかにしている。また、このような環境のなかで、「翻訳者や通訳者はこれからも必要とされるのか」という質問を、様々な場所で学生から受けるようになってきた。実際に、2025 年に Microsoft 社が発表した論文（Tomlinson et al., 2025）は、膨大なデータをもとに、AI が将来的にどのような職業にどういった影響を与えるのかを分析しているが、AI の影響をもっとも大きく受ける職業として翻訳者が挙げられている。したがって、本科目を受講した学生が、翻訳を学ぶということに対して、あるいは本科目で扱う翻訳という行為に

ついて、どのような考えを有しているのかについても、考察したい。そのうえで、AI 翻訳や生成系 AI が自由に使える環境における翻訳教育についても、考えてみる。

2. 先行研究のレビュー

ここ数年、翻訳教育における AI の影響や活用に焦点を当てた研究は明確に増加している。そして、AI の導入は、翻訳教育において翻訳の質の向上をもたらし、教育上の効果という点でも有効であるという研究結果が蓄積されつつある。一方で、翻訳者に求められるスキルセットは劇的に変化し、それに合わせて、翻訳教育のカリキュラムの再構築が必要であることも指摘されている。例えば、Kruk & Kałużna (2024) は、ポーランドの大学生 49 名を対象とした研究で、機械翻訳ソフトのみを用いたグループ、AI や機械翻訳を用いないグループと比較し、AI を用いたグループは、もっとも質の高い翻訳を産出しただけでなく、AI の使用が学生の動機づけを促すこともわかったとしている。同様に、サウジアラビアの大学で翻訳プログラムに所属する 59 名の女子大学生を対象にした研究（Alotaibi & Salama, 2023）でも、AI 翻訳アプリの利用により、英文テキストのアラビア語訳において、エラーの数が統計的に有意に少なくなったことが示されている。Chen (2024) は、翻訳教育における AI の利用と応用について、課題や利点、実践のモデル、今後の展望について広く検討しているが、残念ながら具体的なデータに基づいた分析ではない。

上述の Chen (2024) は、教師が AI を使用する技術を習得する必要性や、教師の役割の変化について指摘するとともに、学生も AI の翻訳を校正したり推敲したりする能力が必要になるとしている。Wan (2023) も、中国語の翻訳の教員 29 名を対象にした調査をもとに、翻訳者に求められる能力について議論している。そして、デジタル時代の翻訳者には、言語能力、コミュニケーション能力にくわえ、技術能力（機械翻訳技術の利用、ポストエディティング、翻訳の品質の評価能力等を含む）や、デジタル能力も必要であるとする。ポストエディティング能力の重要性について

は、ベトナムの大学で 109 名を対象に実施したアンケート調査 (Nguyen, 2025) においても強調されている。この研究は、AI を採り入れた「バイリンガル壁新聞プロジェクト」における学生の翻訳能力を考察したもので、AI ツールを授業に組み込むことは、個別化された学修支援だけでなく、実務的スキルの習得にも有効であると指摘している。そのほか、AI 時代に新たに求められるスキルとして、Zaghlool & Khasawneh (2023) は、批判的思考能力や創造性を挙げている。これは、ヨルダンの翻訳の教員 83 名と AI の専門家 151 名を対象に実施したアンケート調査に基づいた量的研究で、新しい翻訳プログラムにおいては、学修者の創造性・批判的思考の育成を、翻訳カリキュラムの継続的な見直し、AI 技術に特化した授業の組み入れ、業界との連携、教育方法の多様化などを通して重視する必要があると結論付けている。このように、先行研究においては、翻訳者教育は今後も必要であり続けるものの、これまでの翻訳 (者) 教育とは異なったカリキュラムにおいて、新しいスキルセットを身につけさせる必要があるという議論がなされている。前述の Tomlinson et al. (2025) においても、翻訳者は AI による影響をもっとも受けるものの、AI が完全に翻訳者に取って代わるわけではなく、パートナーや補助的なツールとして活用される可能性が高いことを述べている。また、文脈の理解や文化的ニュアンス、深い知識といったところは、人間の判断が必要であるとも指摘している。

日本の大学における AI の利用を、「翻訳 (者) 教育」というコンテキストで研究したものは、現時点ではみつけれない。一方、外国語教育という領域における AI (翻訳) の導入や影響については、さらに研究の蓄積が進みつつあるようだ。瀧本 (2023) で取りあげた先行研究以外のものをいくつかここにあげておく。木村 (2021) は、ドイツ語教育の授業における AI 翻訳の活用についての考察であり、学生が翻訳アプリを利用していることには、筆者は 2019 年から気づいていたと述べている。自らの授業実践を振り返り、学生の AI 翻訳の使用を前提とした授業内容に変えていく重要性を強調するが、初学者には AI 翻訳の使用制限も必要であると指摘している。木村 (2023)

も、同様に、筆者の授業を検証したもので、アンケート結果に基づき、学生は AI 翻訳が学習意欲の向上や内容理解に役立ったと報告する一方、誤訳や訳抜けなどの問題点があることも認識しており、ポストエディット的能力を身につけさせることが重要になると述べている。野口 (2023) は、英語のプレゼンテーションの準備に AI 翻訳を活用した大学 2 年生 9 名に対し実施した、5 項目の簡単なアンケート調査に基づく報告であり、外国語教育では、AI 翻訳の存在を前提として教育内容や方法を変革すべきとしている。佐藤 (2024) は、英語学習者を英語の能力別に分け、AI 翻訳が、どのグループに、どのように影響を及ぼしているのかを検証している。166 人の学生と学校教育の教員 123 名を対象にしたアンケート調査で、学習者の AI 翻訳に対する認識や英語学習への意識は、各グループによって異なることを指摘している。例えば、AI 翻訳の利用への抵抗感は、教員が最も強く、学生のなかでは英語力上位層の方が下位層よりも強い。また、AI 翻訳は、英語力上位層にとっては有効なツールになる可能性がある一方で、下位層にとっては「逃げ道」となり学習意欲の低下につながることも考えられると述べている。そして、教員は、AI 翻訳についての理解を深め、指導方針や利用規定を設定すべきであるとしている。柳瀬 (2023) は、教養・共通教育課程における英語のライティングの授業を自ら実践した経験にもとづいて議論を進め、具体的には、制度、言語能力、原理的理解、教材、フィードバックという 5 つの要因を整えることで、AI 翻訳を用いた授業を成功させることが可能であると述べている。そのうえで、AI 翻訳の導入によって、英語のライティングの授業が不必要になるわけではなく、より高度な学修が可能になり、AI 技術が進展することによって、英語教育全体の再構築も必要になるとしている。

このように、日本の大学の外国語教育の領域では、AI の利用を否定的にとらえる学習者や教員について報告があり、使用の制限にも言及がみられるものがあるが、日本以外で実施された翻訳教育における研究においては、AI を用いた教育・学修の影響は肯定的に捉えられており、AI 翻訳の使用を限定すべきという指摘は見当たらない。そ

して、翻訳教育においては、AI 翻訳を中心として、AI を積極的に教育に導入する方向に沿った議論がなされている様子が明確にうかがえる。日本の大学における、翻訳の授業を取り上げての研究は今後進展していくのだろうが、本稿では、その先陣を切って考察を始める。

3. 研究対象科目と研究方法

本稿で取りあげる科目は、2017 年度に初めて開講し、現在まで筆者が継続して担当している、日英・英日翻訳の授業である。これは、学部 3 年次配当の専攻応用科目で、大学院修士課程の学生も履修可能である。1 クラスあたりの人数は 20 名（開講当初は 25 名）に制限しているが、受講希望者が多いため、2018 年度からは 2 クラス設置している。受講者希望者はそれでも毎年受け入れ可能人数を超え、年度初めに学業成績による受講者選考を実施している。2025 年度のシラバスに記載のある学修到達目標は以下のとおりである。

- ・ 英語のテキストをより正確に理解し、分析できるようになる。
- ・ 日本語と英語の違いについての理解をさらに深め、それに気づくことができるようになる。
- ・ より高度の英語・日本語の運用・表現能力を示すことができるようになる。
- ・ 異文化間のコミュニケーションにおける翻訳者の役割を理解し、説明できるようになる。
- ・ 翻訳の基本的理論を理解し、説明できるようになる。
- ・ 翻訳をとおした異文化間コミュニケーションにおいて起こりうる問題と原因を理解し、解決法を考えることができるようになる。

授業では、翻訳理論や翻訳（者）の倫理的側面等にも触れるため、学生のプレゼンテーションやレポートによる評価も含んでいるが、15 週のうち 10 週は翻訳の課題を課しており、提出のあった目標テキスト（翻訳文、以下 TT¹⁾）のディスカッションを中心に毎回の授業を進める。起点テク

スト（原文、以下 ST²⁾）は、英語・日本語どちらも扱い、テキストのジャンルも、マンガ、ビジネス文書、法律文書、字幕翻訳、レシピなど、幅広い。

翻訳の課題は、ほぼ毎年内容をアップデートしているが、2017 年度の開講当初から 2025 年度まで毎年使用してきた英文広告があり、本稿では、このテキストの TT を分析の対象として取りあげる。ST は、英語の女性雑誌に掲載された A4 片面 1 ページのフルカラー英文広告で、テキストの文章（81 ワード）は参考資料として後掲しておく。課題は、日本の同等の雑誌に翻訳版を掲載すると仮定し（翻訳の目的等の詳細は「翻訳コミッション」として学生に提示している）、目標テキストを完成させるというもので、成績評価の対象（全体の 15% の割合）である。また、翻訳の課題には、「コメンタリー」を添付することを学生に義務付けている。翻訳にかけた時間や、用いたりソース・ツール、困った点やその解決法などを記すことになっているが、数行しか書かない学生もいれば、数ページにわたる詳細なレポートを添付する学生もあり、均質なデータとしては扱えないものの、翻訳に対する学生のアプローチや翻訳のプロセスを理解するための重要なパラテキストであり、これも分析の対象にする。

本稿では、まず、学生が翻訳した TT と翻訳のプロセスに、経年的な変化がみられるのかどうかを検討する目的で、2017 年度、2021 年度、2025 年度に本科目を履修した学生が提出した課題を分析の対象とする。開講当初の 2017 年度は、授業では電子辞書を使っている学生が多かったが、2025 年には、多くの学生が AI 翻訳や生成系 AI を用いて翻訳を完成させたことを、前述のコメンタリーで述べるようになってきている。つまり、これらのグループの間には、どのようなツールを用いるのかを含めた翻訳へのアプローチ、そして実際に産出した目標テキスト、その双方に変化がみられる可能性があり、それを分析するのが本稿の第一の目的である。2021 年も比較の対象に含めるのは、2021 年が 2017 年と 2025 年の中間の年であること、2021 年頃にはすでに AI 翻訳の精度が向上しており、学生も用いるようになってきていただろうこと、この年あたりから学生の提出する

TTに誤訳(STの意味の取り間違い)が極端に少なくなった一方、似たようなTTが増えたと筆者が実感していたこと、といった理由による。

分析は筆者がテキストを質的に分析しつつ進めるため、効率性の観点から、2021年および2025年度については、2クラス分ではなく、1クラスの提出分のみを取り上げる。2017年度の授業は木曜日開講であったため、2021年度、2025年度についても、便宜上、木曜日開講のクラスを対象として取りあげることとする。この木曜のクラスは、2021年・2025年のいずれの年度においても、学生の数や学年、成績といった点で、もう一方のクラスと同様であり、意図的に選択したクラスというわけではない。各年度の木曜クラスの履修者は、それぞれ、26名、21名、21名であった。

本稿では、学生が提出したTTとコメントリーという2種類のデータを質的に分析し、議論を進めるが、2025年度のグループについては、くわえて、もうひとつのデータセットも分析の対象としたい。授業の最初(第1週)と最後(第15週)に、LMTであるmanabaのアンケートで、AIと翻訳についての意見と、AI時代に翻訳を学ぶことの意義について、学生に自由記述で意見を尋ねているためである。対象とするクラスの受講者21名のうち、最初と最後の両方のアンケートに答えた18名の回答をデータとして用いる。

実際の分析を開始する前に、まず、生成系AIのMicrosoft CopilotおよびGeminiを用い³⁾、予備分析を実施した。予備分析をおこなったのは、データの分析を実施する意味があるかどうかをまず確認するためであり、本稿におけるデータの分析は、AIが生成した回答をもとにしたものではない。後述するとおり、AIの予備分析では、ここで取り扱う3つの年度のグループには、明確な相違があることが示されたため、筆者が実際に、学生の提出した翻訳文およびパラテキストを一次資料として、詳細な分析を進めることにした。以下、その結果を報告する。

4. 分析の結果

4.1 目標テキストの比較

ここでは、2017年度、2021年度、2025年度の

受講生が提出した目標テキスト(TT)の特徴を検討する。それぞれの年度のグループを、以下、グループ17(2017年度)、グループ21(2021年度)、グループ25(2025年度)と呼ぶ。

上述した予備分析であるが、Microsoft CopilotおよびGeminiには、それぞれのグループのTTの特徴を分析し、その後、3つのグループを比較するように指示した⁴⁾。その結果、正確性については、年度が新しくなるごとに精度が増し、表現力や創造性についても同様で、2025年度のTTがもっともすぐれているという評価であった。一方で、グループ内のバリエーションについては、どちらのAIの分析でも、グループ17が最も多様性が高く、表現の幅が広い。グループ21になると、似通った表現が多くなり、グループ25は類似性をもっとも高く統一感のある表現がみられるという結果であった。筆者による分析・比較の結果はどのようなものか、以下ではそれを記述する。

まず、各グループから2つのTTを選び、比較検討してみる。取りあげるのは、それぞれのグループのなかで、TTの改良が最も必要であると筆者が考える2つのTTであり、それをもとに考察を進める。高評価のTTについても比較検討してみたが、それぞれに優れた点があり、有意義な比較検討ができないためである。以下、6つのTTを分析する。

【グループ17】

(17a)

大きくなればでこぼこ道でも走れるから

こぶや擦り傷は成長し母から離れる過程では必然で、そのたびに成長していくものです。そこで今回は一人のあるオーストラリア人が病院の専門医を奮い立たせて作ったバンドエイド『ブランド ヒーリング ゲル』を紹介します。このバンドエイドはあなたの擦り傷や日焼け、小さなやけど、水疱瘡を治すための少量の液状の愛情が付着しています。そしてこのバンドエイドなら、あなたに最高の効果を与えることが出来ます。

(17b)

成長はけがを伴う

こぶや擦り傷はママのもとへ走っていくようになるのと同じような成長過程の一つです。現在、オーストラリア出身の日焼けの専門家によって医療用に作られたヒーリングジェルが発売されており、擦り傷、日焼け、軽い火傷、蕁麻疹の症状を緩和し、治癒します。この商品はバンドエイド社から発売されており、皆様のおかげで今のバンドエイド社があります。

【グループ 21】

(21a)

成長は危険なものと隣り合わせです。

こどもは大きくなるにつれ行動が活発になるためケガをしやすくなります。「BAND-AID キズパワーパッド」はオーストラリアの熱傷専門医によって医療現場での使用を目的として開発され、今では家庭用として貼るだけで、すり傷、日焼け及び水ぶくれなどの軽度のやけどによる痛みをやわらげ、きれいに治します。私たち BAND-AID ブランドだからこそその最高の効果が期待できます。

(21b)

ちょっとくらいケガをしたって、だいじょうぶ。

転んだり、擦りむいたり、君はそうしてケガをしながら成長する。オーストラリアの専門医が開発したバンドエイド®のヒーリングジェルなら、君が擦りむいても、火傷をしても、水痘ができたとしても、少し塗るだけで炎症を鎮めて治してくれる。君の成長を見守りたいから、わたしはいちばん安心できるバンドエイド®を選ぶ。

【グループ 25】

(25a)

成長はスムーズじゃないから

転ぶことやすりむくことは、お母さんに駆け寄ることと同じくらい成長に大切な一部である。このバンドエイドのヒーリングジェルは、オーストラリアの火傷の専門家が病院で

使用するために開発された。少しの量で、あなたの擦り傷、日焼け、軽い火傷、水ぼうそうの痛みさえもやわらげ、治してくれる。バンドエイドは、いつも最高品質を提供する。

(25b)

成長には陰しい道のりがつきものだから。

たんこぶや擦り傷は、それができた時、お母さんのところに駆け込んだ分だけ成長の一部になる。今日、病院で使用するためにオーストラリアの火傷専門家によって開発された BAND-AID ブランドヒーリングジェルは、擦り傷、日焼け、軽い火傷、水ぼうそうさえも和らげ、治りを良くするために少量の無形の愛を届けます。また、BAND-AID ブランドの製品なので、その効果はお墨付きです。

グループ 17 の 17a の TT には、意味の取り違えが散見され、ST の理解が十分にできていないことが明らかである。表現もごちないところが多い。17b も最後の文章が ST のメッセージの意味を反映していないほか、意味のズレが確認でき、表現の面でも改善すべき点は多い。また、どちらも、“Now” という語の接続詞的な機能が表現できていない。グループ 21 では、21a は、この商品がジェル状の塗り薬であるのに、貼って用いるパッドであるというおおきな誤解をしており、他にも意味の取り違えがあるものの、広告を意識した文章に仕上がっている。一方で、21b の TT は、広告の翻訳を意識した表現が用いられ、ST の中心となるメッセージを伝えようとする努力は認められるものの、母親の視点が翻訳に反映できておらず、省略が目立って多く、正確性の点で改変の余地がおおいにある。グループ 25 の翻訳文は、ST が意図するメッセージはよく理解しているといえる。例えば、25b は、“(apply) a bit of liquid love” という表現を、「少量の無形の愛」と表現しているところからも、それがうかがえる。ただ、「和らげ」という語を「痛み・症状」に言及せずに用いるなど、表現の面でさらなる改善が必要であろう。25a については、省略（例えば、“liquid love”）があり、「専門家が～開発された」といった主述の一致を含め、表現面でも変更すべき点がみられる。このように、意味の

取り違えや誤訳は、グループ 17 とグループ 21 にはみられるものの、グループ 25 になると、もっとも低評価の TT でも、それがほとんどない。それぞれのグループの TT には、ここで引用した TT 以外についても、筆者は何度も目を通したが、翻訳の質には明確な差があり、年度が新しくなるにつれて質が向上していることが確認できる。

一方で、上述したように、AI を用いた予備調査では、多様性については、グループ 17 の多様性をもっとも高く、グループ 25 がもっとも類似性が高いという結果であった。筆者が実際に分析してみると、グループ 17 では、26 名の TT に、似通ったものはみられない。TT で用いている語彙や表現も非常に幅広く個性的で、広告としての文章スタイルも多様多彩である。しかし、グループ 21 では、キャプションだけに注目してみても、「成長にケガはつきものだから」(2 件)、「成長に傷はつきもの」(2 件)、「成長にキズはつきものだから」と、若干異なるものの、21 の TT のうち、5 つがほぼ同じである。「でこぼこ道」という表現も 4 つの TT にみられる。グループ 25 では、まったく同じ表現は再度なくなり、日本語の使い方には個性が反映されている。しかし、ST の意味から逸脱したものがほとんどなく、全体的に広告文としてのトーンにも、均一感がみられる。

ST のなかで訳出が難しいと考えられる“liquid love”という表現に注目してみると、グループ 17 で最も多かったのは、「母親の愛情」というニュアンスは訳出しないという方略で、約半数(26 名中 14 名)の学生の TT において、“love”というメッセージが反映されていない。訳出している学生の表現をみると、「液状の愛情」、「愛の雫」、「愛情液」、「愛のジェル」、「愛の力」などがあり、愛という単語を用いた直接的な訳が多いものの、バリエーションが認められる。グループ 21 では、「愛情のこもった…」(4 名)、「愛情をこめて」(2 名)、「愛のリキッド」、「愛のジェル」といった訳があり、ここでも、キャプション同様、よく似た訳があることがわかる。このグループも、21 名中 10 名が、愛情というメッセージを訳出していない。グループ 25 になると、訳出をしていない学生は 21 名中 4 名のみになる。訳

出方法は、グループ 17 や 21 ではまったくみられなかった「やさしさ」や「やさしく」を用いた学生が 8 名おり、「液体タイプの“やさしさ”」や「ママの優しさ」、「やさしさのしずく」といった表現が出現している。愛という語を用いた場合でも、「ちょっとした愛情」や「愛情たっぷりのケア」といった、高度な処理ができている訳が含まれるようになっている。

このように、3 つのグループを比較すると、顕著な相違点や特徴があることが TT から確認できる。とくに注目すべきは、ここでの分析で、グループ 21 の翻訳文にのみ、類似した表現が多いという点である。ここで取りあげたような、独特な比喩を用いた英語の翻訳では、複数の学生が偶然に同様の表現を使うというのは、筆者の経験上ほぼありえないことから、学生が AI 翻訳を用いて翻訳を完成させた可能性が高いと考えている。例えば、DeepL の日本語版はすでに 2020 年に日本語に対応している。そうでなければ、AI 翻訳がまだ存在していなかった 2017 年との差を説明することは難しい。それでは次に、それぞれの TT が産出されるまでのプロセスに注目し、この 3 つのグループにおける差の理由を探してみる。

4.2 翻訳のプロセスとアプローチ

ここでは、TT に添付する形で提出されたコメントリー(パラテキスト)を分析した結果を記述する。上述のとおり、コメントリーの内容や長さは学生によって異なるが、ここでの目的は、学生それぞれの TT とパラテキストの関係の分析が目的ではなく、各グループの間に特徴的な差異が認められるかどうかを考察することである。

まず、翻訳にかけた時間に注目する。グループ 17 と 21 については、どちらも平均は 2 時間であった。グループ 17 では、最短が 50 分、最長は 3 時間(2 名)で、大多数が 2 時間と報告している。一方、グループ 21 では、最短が 1 時間(3 名)、最長は 4 時間で、3 時間が 4 名、2.5 時間が 3 名と、グループ 17 に比較すると、ばらつきがみられる。グループ 25 の平均は 1.3 時間と、TT 完成までの時間が他の 2 グループに比して明らかに短くなっている。最短は 45 分、最長は 2 時間(2 名)で、大多数は 1 時間ないし 1.5 時間と報告し

ている。

用いた資料やツールという点でもグループ間に差異が認められる。当然ながら、Google 検索やインターネットの情報は、企業の公式ホームページをはじめ、課題の ST と同等の日本語広告⁵⁾を参考にするために、すべてのグループが用いたと報告している。それ以外では、グループ 17 は辞書が中心である。グループ 21 でも、ニュアンスを確認するために英英辞書や類義語辞書を活用するなど、様々な辞書を用いたという報告がほとんどだ。筆者は、上述のとおり、この頃から学生は機械翻訳を利用しているだろうと考えていたが、AI 翻訳への言及はまったくない。一方で、グループ 25 では、約半数が ChatGPT や DeepL といった AI ツールを活用したと述べている。ChatGPT の用い方として挙げられているのは、「どの言い回しが適切か質問」した、「誤字、脱字の確認、レイアウトの評価をもらう」ために活用した、自然な表現にするために用いた、対話しながら問題の検討・改善をした、など、多様であった。翻訳の時間がグループ 25 で顕著に短かったのは、AI の利用による効率化によると考えてよいだろう。

授業で扱った翻訳理論の翻訳への応用については、テキスト・タイプ（作用型テキスト）⁶⁾について、どのグループにも言及があったが、グループ 25 では、そのほか、スコボス理論⁷⁾や、書き換えとしての翻訳（Lefevere⁸⁾）、ドメスティケーション⁹⁾などへの言及も確認できる。このように、グループ 25 では、授業内容を応用し、より多くの時間を、表現の推敲と編集に使っている。一方で、グループ 17 では、「これだけ短い文章であるのに、2 時間もかかってしまった」という記述があり、テキストの分量のわりに難易度が高く、短い ST ながらも、意味を把握したうえで内容を理解し、それを表現する作業で手一杯であったことが示唆されている。グループ 17 のコメンタリーには翻訳プロセスの記述が少なく、大多数の学生は、具体的にどの部分の翻訳が困難で、それをどう解決したのかについて報告している。そのなかで、もっとも長い翻訳時間をかけた学生のコメンタリーにはプロセスが記されているので、それを示しておきたい。

C-17-1（所要時間：3 時間）

全体的に文が難しかったので、訳す前に英語で何回か読んで、わからない単語も英語で調べて英語で理解したうえで翻訳に挑んだ。日本のサイトでバンドエイドを調べたうえで翻訳した。広告なので広告を雑誌で見る人を意識して翻訳した。今回の ST には比喩的な表現が多く難しく、大量のインプットがないとこの記事をしっかり理解することは大変だった。この比喩をそのまま日本語に訳すと気持ちの悪い文になるので、日本語にしても自然になるように翻訳した。けがの名称などがたくさん出てきたので、グーグルのイメージを使って調べて、それを日本語だったらなんというかを考えて訳した。

インターネット上のリソースを用いながら、ST のメッセージを読み解き、理解するのに時間をかけている様子をはっきり読み取ることができる。

グループ 21 から、翻訳プロセスについて報告のある、2 つのパラテキストを挙げておく。

C-21-1（所要時間：3 時間）

○翻訳のプロセス

まず一通り ST に目を通す→上から順番に翻訳→分からない単語はその都度調べながら翻訳→コメンタリー→最後にもう一度上から通して読む→家族に添削してもらう

C-21-2（所要時間：2 時間）

広告の表現をサイトで確認し、本文を先に訳し、その後、大文字の部分を訳した。わからない部分があれば、文脈にそった訳語を探した。朝に一度大まかに完成させ、その日の夜にもう一度、添削を行った。

このグループも、グループ 17 同様、基本的にはわからない箇所を調べ、パラレルテキスト等から文章のスタイルを学び、表現を考える、という作業をおこなって翻訳を進めていることがわかる。また、上述したように、授業で取りあげた翻訳理論を意識して翻訳を進めようとする姿勢もうかがえる。例えば、「Reiss の枠組みに当てはめると

広告の翻訳は作用型に該当する。そのため TT を重視し、購買欲をそそるような対話的で作用的な翻訳を目指した」といった記述である。このように、コメンタリーに書かれている翻訳のプロセスについては、グループ 17 と 21 の間に、大きな違いはないようにみえる。上述のとおり、筆者は、グループ 21 は AI 翻訳を利用しているだろうと推察していたが、コメンタリーの分析からは、それを確認することはできない。

グループ 25 では、グループ 21 とは異なり、コメンタリーでの AI ツールへの言及が明瞭に確認できる。ただし、ChatGPT や DeepL を用いたことをコメンタリーで述べているのは、21 名中 10 名のみであり、それ以外の学生については、用いたのか用いていないのかはわからない。1 名は、「今回は量が少なかったため一度 DeepL で全訳を見ることはしませんでした」と、報告している。つまり、他の課題では DeepL によるテキスト全体の訳を参考にしたということになる。AI を用いた翻訳プロセスについて、グループ 25 のコメンタリーには、わからないところを DeepL や ChatGPT で調べながら進めた、といったおおざっぱな説明が多いが、AI ツールを翻訳プロセスのなかにどのように組み込んでいくかわかる記述が 2 件あったので、示しておく。

C-25-1 (所要時間：1.5 時間)

- 1 ChatGPT で広告翻訳を行う際に意識・注意する事を検索する。
 - 2 BAND-AID のホームページで歴史や企業理念を検索する。
 - 3 BAND-AID の日本広告や CM を視聴する。
 - 4 ChatGPT に 1 度 ST の翻訳を依頼する。
 - 5 1～3 のプロセスで確認したことと Translation Commission から逸脱していないかの確認。
 - 6 ST と TT の比較を行い細かなニュアンスの添削をして完成。
- の 6 つのプロセスで翻訳を行いました。

C-25-2 (所要時間：1 時間)

プロセスは大きく 3 段階に分かれている。ま

ずは、起点テキストの分析とターゲットの特定。広告文が「誰に」「何を伝えたいか」を明確にし、そこから日本語で響く表現の方向性を定めた。次に、自分で一度全体を翻訳し、その後 ChatGPT と対話をしながら何度も表現を検討・改善していった。意識と直訳のバランス、感情表現の自然さ、ターゲットに届く語り口など、複数の視点から検証と修正を繰り返した。最後に、全体の語調を統一し、タイトル・導入文・キャッチコピー・製品説明に流れるような一貫性と詩的なリズムを持たせるように整えた。

グループ 25 は、翻訳にかかる時間や、用いたリソース、翻訳プロセスといった面で、他のグループとは異なっている。とりわけ、AI 翻訳および生成系 AI を、翻訳する際のツールとして学生は躊躇なく用いていることが確認できる。上に引用した C-25-1 の場合は、最初に AI を用いて「広告翻訳で気を付けるべきことを調べる」という、翻訳文の生成以外の、興味深い使い方をしている。それから、AI 翻訳の翻訳文をそのまま用いることはせず、例えば「細かなニュアンスの添削」をする、「何度も表現を検討・改善していく」という説明に表れているとおり、ポストエディットの過程が重要であることと、学生が実際にそれを実践していることが示されている。C-25-2 も同様で、「何度も表現を検討・改善していった」、「複数の視点から検証と修正を繰り返した」、「一貫性と詩的なリズムを持たせるように整えた」というように、編集や推敲を何度も実行している。

4.1 では、グループ 17、グループ 21、グループ 25 の順に全体として翻訳の質が良くなっていると分析したものの、グループ 17 とグループ 21 の差の要因は、コメンタリーの分析からはできなかった。一方で、グループ 25 の翻訳の質が他のグループより高い理由については、新たな AI ツールを活用しているからだと結論付けても問題ないであろう。もし、グループ 21 が、AI 翻訳が生成した翻訳を（コメンタリーでは開示することなく）参考にしていたとすれば、グループ 25 との翻訳プロセスにおける最大の差は、生成系 AI が使用可能であるか否かという点になる。ま

た、AI 翻訳も、例えば、DeepL が、2024 年に大規模言語モデルという新たなモデルを導入し¹⁰⁾、性能が 2025 年にはさらに進化しているという点も考慮に入れる必要がある。AI 翻訳の利用によって、翻訳の質が向上するという点は、Kruk & Kałużna (2024) や Alotaibi & Salama (2023) の先行研究の結果を支持している。ただ、ここで取り上げた授業では AI の使用を義務とはしていない点は、これら研究とは異なっている。

4.3 学生の考える AI と翻訳

このセクションでは、2025 年度に的を絞り、本科目の受講生が、AI 時代の翻訳をどのように考えているかを分析した結果を報告する。分析のもとになったデータは、上述のとおり、第 1 週および第 15 週に *manaba* で実施したアンケートへの学生の回答である。このアンケートでは様々なことを学生に尋ねているが、以下の 2 つの質問への回答をここでは取りあげる。なお、第 15 週の質問には、学生自身の第 1 週の回答を確認した後、各自に答えてもらった。

【第 1 週（授業開始前）】

- 1-1) 将来的に、翻訳はすべて AI が扱うと思いますか。それはどうしてでしょう。
- 1-2) AI が簡単に利用できる環境の中にあつて、授業で翻訳について学ぶことには、どのような意義があると考えますか。正直に答えてください。

【第 15 週（授業終了後）】

- 15-1) 「翻訳は将来 AI が扱う」かどうかについて、考えは変わりましたか。それはどうしてですか。
- 15-2) 「AI が簡単に利用できる環境の中にあつて、授業で翻訳について学ぶことには、どのような意義があると考えますか」という問いについて、考えは変わりましたか。それはどうしてですか。

まず、AI が翻訳をやるようになるかどうかに関する学生の考えについて、分析結果をまとめる。授業前には、18 名の学生のうち、3 名の学生

が将来的にはすべて AI が翻訳を扱うであろうと回答した。残りのうち 4 名は、その可能性はある、あるいは技術のさらなる進歩といった条件によってはそうなるかもしれないと回答している。それ以外の 11 名は、AI は、文脈や感情、ニュアンスなどは理解できず、AI ができない分野の翻訳があると指摘している。それでは、授業を受講後、学生の考え方に変化はあったのだろうか。

AI がすべてをやることはないと考えていた学生 11 名からみていくと、3 名はさらにその考えが強くなったと述べている。例えば、ある学生は、「さらに強くそう考えるようになりました。[...] 感情の表現が大切な翻訳は AI より人が行った方が、よりよいものになると思うから」と述べている。また、お笑いなど特定の文化に根差したものは AI が翻訳することはないだろうと授業前に回答していた学生は、「[考えが] 変わりました。お笑いだけでなくシンプルな翻訳にも 100% 直訳が良いと考えられるもの以外については翻訳は人間がまだまだ扱うと思います」と答えている。一方で、ある学生は、AI がすべてを扱うとは考えないものの、「AI でもある程度はプロンプトの書き方で人間のするような感情の表し方やテキストにあった翻訳ができると思います」と、少し考え方に変化が生まれたことを報告している。

翻訳は AI が扱うようになるという AI 肯定派であった 3 名と、そうなる可能性があるとした 4 名については、全員が考えを翻している。可能性があるを開始前に回答した学生のうちの 1 人の授業後の回答は以下のとおりである。

翻訳の授業を通して、翻訳行為において人間が AI に負けることはおそくないのではないかという考えになった。課題をする中で、AI の力を借りることもあり、精度を試してみたが、やっぱり語彙選択や表現を変えるべきところが結構あると思った。そのようなところで人間の翻訳の方が優れており、翻訳行為が AI に取って代わることはないのではないかと思う。

次に、授業で翻訳を学ぶことの意義について、授業開始前・授業終了後の、学生の意見をみてみ

る。自ら選択して翻訳の授業を履修した学生たちなので、受講に何らかの期待をもち、受講の意義をみだしていたであろうことは想定できるが、全員が「意義がある」と述べている。ただし、学生の考える意義のうち、もっとも多かったのが、「AIにはできないスキルを修得すること」であった。それには、文脈やニュアンスを理解し、感情をくみ取る力などが含まれる。次に多いのが、AIを使いこなす力の修得で、具体的には、AIの生成した翻訳の評価や修正などの能力が挙げられている。つまり、受講前から、翻訳においてはAIの使用を想定し、それを用いたり、それができないことを身につけたりすることが重要だと考えていたことになる。その他の意義では、思考力向上や、語学力を身につけること、読解力向上、異文化理解などに言及があった。

授業終了後の回答では、受講中の実際の体験に基づいた記述が多くなっている。授業開始前と同様、授業終了後も全員が（翻訳の授業の受講には）「意義がある」と回答している。授業開始前の記述と比べると、翻訳という行為に対する、学生の意識の明確な深化が読み取れる。一方で、もともと抱いていた考えに変化がない学生のなかには、当初の考えが確信に変わったとする者もいる。

読解力や思考力、語学力といった具体的なスキルの伸長について述べている学生もあるが、より広い意味での翻訳スキルの向上については、例えば、以下のような記述がある。

翻訳行為は、思っていたより奥が深く、本当に色んなことを考えて訳さなければならないということを知れた。次、翻訳をするときに、使える理論やアプローチがたくさんあると思うので、授業で翻訳を学ぶことは多くの意義がある。

翻訳は単なる言語の変換ではなく、STをTTにするときに、翻訳をTTの文化に合わせるか、それともSTの文化をそのまま伝えるかというように言語以外の側面についても多く考えることができるからです。

しかし、もっとも言及が多かったのは、ここでも、AIについてであった。例えば、次のようなものである。

- AIができる翻訳の限界を知り、逆に人間による翻訳の領域を知る
- 自分で行う翻訳とAIが行う翻訳で優劣を考えることが出来ました
- AIの間違いや誤解を見つけ、必要に応じて修正できる能力を身につけることができます
- AI翻訳の活用方法、また、活用するうえでの人間の役割（正しいプロンプトの作成や訳文のチェック）を実際の翻訳を通して学んでいくことができる

筆者は、もちろん、学生がAIツールを利用することを想定し、そのうえで学びにつながる翻訳教材を意識的に選んできた。そして、翻訳者の役割がなるべく実感できるような授業計画を立てるよう努めてきた。しかし、AIに関連するスキルに対する学生の認識は、予想外のおおきさであったと言わざるを得ない。筆者は授業内で、AIの使い方や、「正しいプロンプトの作成」について触れた覚えはない。ということは、この授業を通じて、学生がAIを使うなかで、自ら試行し身につけていったスキルであるということができた。Nguyen（2025）の研究では、教育にAIを組み入れることは、ポストエディティング等のスキルの向上に有効であると指摘しているが、ここでみてきたグループ25の学生は、AIの利用を意図的に授業に組み入れなくとも、これらのスキルの重要性を認識し、実践するようになっていたようだ。

4.4 分析結果に基づく考察

これまでの分析の結果、グループ25の学生については、AIをまったく用いない学生がいた可能性は排除できないものの、学生は何らかの形でAIを活用して本科目を受講していたと想定してよいのではないかと考える。ちなみに、筆者は、この授業の受講生に対して、AI翻訳や生成系AIは用いるべきでないといった旨の指示は、一切していない。むしろ、翻訳業界においてAI翻訳が

どのように用いられているのか、どのようなテキストがAI翻訳に適しているか（あるいはいないのか）、現レベルでのAI翻訳の性能はどの程度なのか、といった内容を授業では説明してきた。また、AI翻訳を用いる場合にはプリエディティングやポストエディティングの作業が大切であることも伝えている。

グループ17とグループ21の間に、コメントリーの内容に基づく差がほとんどみられなかったという点については、明確な説明をおこなうのは難しい。ただ、2022年夏に実施したインタビューに基づいてまとめた瀧本（2023）では、大多数の学生がAI翻訳（とくにDeepL）を専門科目の学修に用いていることが明らかになっている。インタビューの対象は、大学3・4年で、そのうち3名は高校時代から自動翻訳を使用していると報告している。また、木村（2021）も、自らの担当する授業では、2019年から学生はAI翻訳を使用していたと述べている。したがって、2021年度を受講生のなかに、AI翻訳を用いている学生がまったくいなかったということは考えにくい。ただ、瀧本（2023）では、学生が後ろめたさなど、否定的な感情をもちながら、AI翻訳を専門科目の学修に用いていたことや、教員の目も気にしながら使用していたこともわかっている。とくに、本稿で取りあげた科目は翻訳に特化した科目であり、コメントリーにAI翻訳の使用を開示することを学生がためらった可能性はじゅうぶんに考えられる。一方で、大学におけるAI翻訳や生成系AIの取り扱い方や、学生の認識は、この数年間でおおきく変化している。例えば、筆者の所属する学科では、2025年の5月に「『Academic Integrity』（学問的誠実性）の基本ポリシー」および「課題などにおける生成AI利用のガイドライン」を定め、これらの順守を学生に求めている。そのなかで、AIを使用した場合は、それを開示すべきことが示されている。こういった環境の変化のなかで、グループ25の学生は、AIツールの使用をコメントリーでも正直に記述した可能性がある。

さて、4.3の分析では、グループ25の学生はAIを活用しつつ翻訳に取り組み、そのなかで、AIを使用するためのスキルを学んだことを多数

の学生が実感し、受講の意義と捉えていたことが明らかになった。ただ、上述したとおり、2025年度の授業シラバスでは、AIに関連するスキルや知識については、まったく言及していない。したがって、とくに、学修到達目標については、AIのある新たな環境のなかでの学びに合わせた形で、刷新する必要があるようだ。現在の授業形態でも、AIを翻訳に用いる際に必要なスキルを、学生自らが身につけていた様子が、今回の分析では明らかになった。一方で、到達目標を修正すると、目標が達成できているかどうかを評価するための仕組みが新たに必要になる。より明示的に、より踏み込んで、翻訳においてAIを活用するためのスキルを学修できる、体系的な授業設計と評価タスクの導入が必要であろう。この点は、AIに特化した授業の採用の必要性を指摘する、Zaghlool & Khasawneh（2023）の研究を支持することになる。さらに、Tomlinson et al.（2025）は、AIの出現によって翻訳者が不必要になることはなく、有効なツールとしてAIが利用されるだろうと述べているが、これは、学生たちの認識や実践と、まさに一致しているといえ、この点も授業ではいっそう強調していくべきであろう。

5. おわりに

本稿では、専攻応用科目のひとつである、翻訳を学修する科目に焦点をあて、学生が提出した翻訳の課題やアンケートへの回答をもとに分析を進めてきた。その結果、2025年度の学生が提出した目標テキストがもっとも完成度が高いこと、翻訳に用いたツールやプロセスが、2017年度や2021年度の学生とは異なっており、AIツールを活用して目標テキストを完成させていることが確認できた。さらに、2025年度を受講生はAIツールの利用を肯定的にとらえ、その使用にまつわるスキルを修得したことを実感していることもわかった。

本稿では、どのような経年変化がみられるのかという視点からデータの分析を始めたが、今後は、AIを駆使するグループのみに焦点をあてて、さらに詳しい分析を進めていく必要があるようだ。例えば、ここでは、起点テキストが英語の課

題ひとつのみをデータとして取り上げたが、日本語を起点テキストとする課題についても、考察を進めるべきであろう。学期中の授業の進展にもなって、学生のスキルや意識がどのように変化していくのかといった視点での分析も興味深い。また、今回は翻訳プロセスの理解のために、学生のコメントリーを翻訳のパラテキストとして分析したが、上述したように、簡単な記述しかないものもあり、プロセスをさらに深く探る方法についても、検討すべきである。AIを用いることができる環境において、教員がいかにそのスキルを身につけるのかという点もおおきな課題である。教員が教えている学生は、デジタル・ネイティブな世代に属し、学生主導での授業の展開といった方向性を検討することも必要かもしれない。

注釈

- 1) Target Text の略。
- 2) Source Text の略。
- 3) 筆者の所属する大学の教員には、これらの AI へは無料でアクセスが許可されているため、ここではこの2種類を使用した。Microsoft Copilot にはバージョンは開示されておらず、Gemini は、Flash 2.5 バージョンを用いた。いずれも、2025 年 10 月 30 日に使用した。
- 4) 実際に用いたプロンプト例を挙げておく。最初のプロンプトは、「添付するのは、2つのファイルです。『ST_E_word』というファイルは、起点テキストです。このテキストを翻訳する課題を大学の授業で学生に課しました。No. 1 から No.26 まで 26 名の学生が目標テキストを提出しました。それをまとめたファイルが『17_EJ_TTs』です。この 26 名の目標テキストを、以下の3つの観点から分析してください。(1) 原文の理解と翻訳の正確性、(2) 文法の正しさや流暢さ、および表現の豊かさ、(3) 創造性と日本語へのトランスフォーメーション」であり、各グループについて分析を依頼した。その後、「これまで分析をしてもらった3つのグループの比較をしてください」というプロンプトで比較を指示した。なお、分析の際の3つの観点は、筆者が TT の評価のために授業で実際に使っているルーブリックの評価項目の一部であるが、それぞれの項目について、とくに詳細な判断基準を AI に示したわけではない。
- 5) 翻訳研究では、「パラレルテキスト」と呼ぶ。
- 6) Reiss は、テキストを機能によって3つに分類し、そのタイプによって、翻訳の方略は決まってくる

とした。

- 7) Vermeer が提唱したもので、翻訳の目的（スコパス）が翻訳の方策を決めるという、TT 重視の機能主義翻訳理論。
- 8) 翻訳は書き換え（rewriting）とする、Lefevere の主張。
- 9) ドメスティケーションとは、フォーリナイゼーションと対をなす考え方で、目標文化・言語には存在しないものを、目標文化・言語に存在する同等のものをを用いて翻訳すること。
- 10) 2024 年 7 月 17 日の DeepL のプレスリリース。（2025 年 11 月 5 日アクセス。）<https://www.deepl.com/ja/blog/next-gen-language-model>

参考文献

- Alotaibi, H., & Salamah, D. (2023). The impact of translation apps on translation students' performance. *Education and Information Technologies*, 28, 10709–10729. <https://doi.org/10.1007/s10639-023-11578-y>
- Chen, X. (2024). Research on the application of artificial intelligence in translation courses. *International Journal of Education and Humanities*, 12 (1), 41–44.
- Kruk, M., & Kałużna, A. (2024). Investigating the role of AI tools in enhancing translation skills, emotional experiences, and motivation in L2 learning. *European Journal of Education*, 60, e12859. <https://doi.org/10.1111/ejed.12859>
- Nguyen, T. N. N. (2025). Enhancing competencies through AI technology and translation integration in the bilingual wall newspaper project. *Computer-Assisted Language Learning Electronic Journal*, 16 (3), 1–23.
- Tomlinson, K., Jaffe, S., Wang, W., Counts, S., & Suri, S. (2025). Working with AI: Measuring the applicability of generative AI to occupations [Preprint]. <https://doi.org/10.48550/arXiv.2507.07935>
- Wang, Y. (2023). Artificial intelligence technologies in college English translation teaching. *Journal of Psycholinguistic Research*, 52, 1525–1544. <https://doi.org/10.1007/s10936-023-09960-5>
- Zaghlool, Z. D. M., & Khasawneh, M. A. S. (2024). Aligning translation curricula with technological advancements: Insights from artificial intelligence researchers and language educators. *Studies in Media and Communication*, 12 (1), 58–70. <https://doi.org/10.11114/smc.v12i1.6378>

- 木村佐千子 (2021) 「AI 翻訳と日本の大学におけるドイツ語教育」『Dokkyo Journal of Language Learning and Teaching』10 : 77-95.
- 木村佐千子 (2023) 「AI 翻訳の外国語教育への影響を考える——獨協大学ドイツ語学科開設科目『テキスト研究 (芸術・文化)』における AI 翻訳の活用例」『獨協大学ドイツ学研究』82 : 1-22.
- 佐藤真理子 (2024) 「機械翻訳と共存する英語教育——抵抗感と学習意義の変容についての分析」『リメディアル教育研究』18 : 81-90.
- 隅田英一郎 (2022) 『AI 翻訳革命——あなたの仕事に英語学習はもういらない』朝日新聞出版社.
- 瀧本真人 (2023) 「大学の専攻科目の学修における機械翻訳の使用と大学生の認識」『国際文化研究』27 : 5-19.
- 野口朋香 (2023) 「機械翻訳の進化と外国語教育」『愛知淑徳大学論集——交流文化学部篇』13 : 47-63.
- 柳瀬陽介 (2023) 「大学教養・共通教育における機械翻訳活用型英語ライティング授業の成功のための諸要因——制度・言語能力・原理的理解・教材・フィードバックの5つの観点から」『京都大学国際高等教育院紀要』6 : 19-33.

参考資料

本稿で取りあげた翻訳課題の起点テキスト

Because growing up can be a bumpy ride.

Bumps and scrapes are as much a part of growing up as running to mum when they happen. Now there's BAND-AID Brand Healing Gel, developed by an Australian burns specialist for use in hospitals, ready for you to apply a bit of liquid love to help soothe and heal scrapes, sunburn, minor burns and even chicken pox. And, because it's from BAND-AID Brand, you know that you're giving them the best there is.